

## ウェズレー・C・ミッチェルのグスタフ・カッセル批判

齋 藤 宏 之

### I カッセルの経済思想とミッチェルの制度主義

グスタフ・カッセルは (Gustav Cassel) は、クヌート・ヴィクセル (Knut Wicksell) やデイヴィッド・デビッドソン (David Davidson) と共に、スウェーデンにおける近代経済学の構築に関わった。第一次世界大戦前後には進歩的自由主義者として知られ、スウェーデンばかりでなく国際的にも傑出した経済学者となった。1920年代には、経済学に最も影響力がある国際的指導者といわれた<sup>1)</sup>。カッセルの門下から、グンナー・ミュルダール (Gunnar Myrdal)、ベルティル・オリーン (Bertil Ohlin)、イェスタ・バッゲ (Gösta Bagge) らが輩出している。

カッセルの経済の現状、とりわけ利子の演ずる役割に関する所見は、イギリス新古典主義ならびにスウェーデン学派に根差していた。また数学を操り、それをを用いて市場が相互に依存していることを説明した<sup>2)</sup>。これを可能としたのは、「理論を単純にし、その『本質的要素』を際立たせること、現実性、そして公平な『理性の恩恵』への政治的

関与を重視すること<sup>3)</sup>」であった。カッセルの理論は、レオン・ワルラス (Léon Walras) の理論に強く関連づけられている。「……カッセルが、市場の相互作用の素朴な相対性理論と定型化された事実を説明する実利的な近道とを巧みに調和させたまさにそのことによって、彼とワルラス流の理論の双方が1920年代に普及した<sup>4)</sup>。」カッセルは、利子率決定、一般均衡論に関する主要業績に加え、景気循環の過剰消費理論も発表し、また購買力平価説を社会に浸透させた。購買力平価説をジョン・M・ケインズ (John M. Keynes) は、その著『貨幣改革論』 (*A Tract on Monetary Reform*) に織り込んだ。さらにカッセルは、自国政府や外国政府、国際連盟からもたびたび助言を求められ、経済政策勧告に関するパンフレットを数多く公刊した。ジョゼフ・A・シュムペーター (Joseph A. Schumpeter) が、「ある程度『中立国民』としての強みを持つがゆえに、カッセルは、第一次世界大戦中も戦後も、主に通貨・国際関係の専門家として、またこれらの問題に関わる国際会議の熱心な参加者として名声を国際的に高めた<sup>5)</sup>」と述べるのもけだし当然といえよう。

ウェズレー・C・ミッチェル (Wesley Clair Mitchell) もカッセルをこう評価している。

1) Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis* (London: Routledge, 1994), p. 1154. (東畑精一、福岡正夫訳『経済分析の歴史』下巻、岩波書店、2006年、743ページ。) —なお、本稿において原書からの引用文に邦訳書のページ数を掲げた際にも、訳文は必ずしもそれによったわけではなく、私の自由に訳している。

2) 因みにポール・A・サミュエルソン (Paul A. Samuelson) は、「……カッセルの著作のほとんど大部分は大衆向けに書かれた。大衆が褒めすぎってしまったからこそ、その当時の学会は褒めおしみてしまった」(Paul A. Samuelson, "Alvin Hansen as a Creative Economic Theorist," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 90, No. 1 February, 1976, pp. 24-25.) と述べている。

3) Hans-Michael Trautwein, "Gustav Cassel (1868-1945)," in *Handbook on the History of Economic Analysis: Great Economists since Petty and Boisguilbert*, edited by Gilbert Faccarello, Heinz Dieter Kurz, Vol. I (Cheltenham: Edward Elgar, 2016), p. 406.

4) *Ibid.*, pp. 408-409.

5) J. A. Schumpeter, *op. cit.*, p. 1154. (前掲訳書、下巻、744ページ。)

「貨幣的現象に関して、カッセルは研究を多く行ったし、大きな影響力を発揮した。1919年以降〔1933年までに〕、現実の政策に、彼ほど影響を及ぼした貨幣理論家は、世界には多分いないであろう。

〔貨幣という〕主題に関して、彼ほど発言の機会を得ている著述家は他にいない。戦前経済学者として世界的に著名であり、スウェーデン語、ドイツ語、英語で偏らずに研究を発表しており、近年重要な通貨に関する会議全ての代表である。権威者となったので、無視することができるものはない。銀行経営者が必要に迫られていることは、経営者の政策をカッセルが非難していることに応酬することである。政治家はカッセルに経営者をどのように指導するか見え書きを準備するように要求している……<sup>6)</sup>」

しかしながら大恐慌発生直後、積極財政主義を主張するスウェーデン学派やケインズらの「新経済学」に反対したことが引き金となり、カッセルは世論からの支持を失った。その要因として、一般均衡論の枠組みを不完全なまま極度に単純化したとか、実証的思考と規範的思考を混同したとか、有益な論考を提案することができなかった<sup>7)</sup>からだといわれたりもした。けれども一方では、ハンス＝マイケル・トラウトワイン (Hans-Michael Trautwein) は、ハンス・ブレムス (Hans Brems) の所説に依拠して、景気循環論への一般均衡アプローチが1980年代に普及したとき、景気循環論・成長理論・金融目標・顕示選好概念などの先駆者としてカッセルが再評価された点<sup>8)</sup>を指摘している<sup>9)</sup>。トラウトワインは、このような

見方に対する異論がその後提起された<sup>10)</sup>ことを承知しながらも、現在では「カッセルの刺激的な単純化は、経済学的思考の発展に触媒作用的な影響を及ぼしている<sup>11)</sup>」と評されようと述べている。

このような正統な経済学の考え方の発展に対して、その妥当性を疑ってきた一つの典型が制度学派である。この学派の「三人の大立者<sup>12)</sup>」のうちのひとりであるミッチェルも、その著『経済理論の諸類型——重商主義から制度主義まで——』(*Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*)においてカッセルの経済思想を論じている。

ミッチェルは、人間が行動する際、制度要因が演ずる役割を重視する。行動を変化しつつある制度の枠組みのなかで、行動主義的立場から発生論的解釈に基づいて研究する。経済学は、ミッチェルの考えでは、制度に現れる行動の科学となる。

経済行動を、それが埋め込まれている制度に基づいて説明する際、ミッチェルがなかでも重視するのが貨幣制度である。貨幣経済として知られている制度の支配的複合体を考察する。貨幣経済を量的方法によって客観的にみる。貨幣経済に反映される行動の様々な発現に関する事実データを収集し、客観的過程を測定する変数がどのような関係にあるかをめぐって、観察を枢軸に研究を進める。

このように経済データを統計的に処理する方法を、ミッチェルは広く利用し、経済行動を客観的かつ量的に分析する。量的研究においては大量現象から開始し、現実の市場からデータを引き出し、社会現象として観察された行動を理解する。フォ

<sup>6)</sup> Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*, Vol. II (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969), pp. 440-441.

<sup>7)</sup> Hans-Michael Trautwein, *op. cit.*, p. 406.

<sup>8)</sup> Hans Brems, "Gustav Cassel Revisited," *History of Political Economy*, Vol. 21, No. 2, Summer, 1989, pp. 165-178.

<sup>9)</sup> Hans-Michael Trautwein, *op. cit.*, pp. 408-409.

<sup>10)</sup> Paul A. Samuelson, "Gustav Cassel's Scientific Innovations: Claims and Realities," *History of Political Economy*, Vol. 25, No. 3, Fall, 1993, pp. 515-527.

<sup>11)</sup> Hans-Michael Trautwein, *op. cit.*, p. 409.

<sup>12)</sup> Jacob Oser, *The Evolution of Economic Thought* (New York: Harcourt, Brace & World, 1970), p. 329.

レスト・G・ヒル (Forest G. Hill) が、その論文「ウエズレー・ミッチェルの計画化論」(“Wesley Mitchell's Theory of Planning”)において述べるように、「正当な知識を獲得するやり方に必要なのは、大衆行動を体系的に観察することに基づいて、理論を経験的に検証することであった。この過程は、集団活動の客観的記録を蓄積し解釈することを求めた<sup>13)</sup>。」

ミッチェルは、演繹の推理に反対し、経済的実態に関する膨大な量の経験的データを収集した。化学や物理学に代表される自然科学の確実な方法に則り観察を重視する。作業仮説と観察との関係を検証する過程、つまり批判的検証過程に魅力を感じた。経済学が何とか対処できるのは、思弁が統制可能な問題だけであった<sup>14)</sup>。

さらにポール・T・ホーマン (Paul T. Homan) はこう述べる。

「量的分析は、経済学の分野において極めて十分に使用されると、このようにして質的分析によって達した結論を実証したり修正する形ではなく、『原理』に関係なく事実を集め、事実自体が与えるような結論や一般概念を引き出す形を取るようになる。それで『景気循環』(*Business Cycles*) は、元来経済理論における企画ではないけれども、理論の分野でそのような傑出した重要な地位を勝ち取った。その著作に含まれる見地や結論が漸次普及していったことによって、正統派の経済観の支配力が若い世代の経済学者に及ぼす影響力が弱体化していったばかりでなく、彼らに有益な結果の見込みを含むタイプの分析を紹介もした。ミッチェルはその当時経済思想に顕著に貢献したが、この貢献は経済生活を正規化しようと

することから、経済生活の複雑な過程を事実の現実的かつ量的研究を通じて理解しようとすることへの著しい変化を促進することにあつたといえよう<sup>15)</sup>。」

それゆえホーマンがいみじくも指摘したように、「ミッチェルは自身の多量の事実に訴えて、その事実を経済過程の説得力のある説明に変える。この説明は、体系的理論の結論を支持しない<sup>16)</sup>。」観察に基づく客観性を重視するから、ミッチェルは正統派経済理論の特異なタイプの内観に対して批判的態度を取る。正統派経済理論の類型は、人間行動は制度が生み出すことを無視して、人間はある特定の制度の論理に完全に支配されると思込んでいるからである。換言すれば、自らが内在する制度に対して外因的であると想定して個人の心理状態を扱うことは、人間を実体のない形式的な人物に仕立てることに直結し、結果として不自然で、浅薄で、不完全な経済分析を行うに至るからである。制度が経済行動に及ぼす影響をめぐる正統派の理論・方法の認識は不十分であるとミッチェルは捉えた。

このようにみえてくると、シュムペーターの「経済社会学は、社会制度すなわち世間一般の社会習慣を分析するのだが、ミッチェルは、その経済社会学というのが最もよい分野を含めるために、経済学の最先端を拡大しようとしたのであろう<sup>17)</sup>」という所説も首肯できる。

ミッチェルの思想体系において、その量的方法論と自身の制度重視の見解とは密接に結びついている。ミッチェルの思想的志向性は、量的であると同時に制度的でもあった。ミッチェルは、自身

<sup>13)</sup> Forest G. Hill, “Wesley Mitchell's Theory of Planning,” *Political Science Quarterly*, Vol. 72, No. 1, March, 1957, p. 106.

<sup>14)</sup> Wesley C. Mitchell, Letter to John M. Clark, reprinted in John Maurice Clark, *Preface to Social Economics* (New York: Farrar and Rhinehart, 1936), p. 413.

<sup>15)</sup> Paul T. Homan, *Contemporary Economic Thought* (New York: Books for Libraries Press, Inc., 1968), pp. 409-410.

<sup>16)</sup> *Ibid.*, p. 409.

<sup>17)</sup> Joseph A. Schumpeter, *Ten Great Economists: From Marx to Keynes* (London: Routledge, 1997), p. 246. (中山伊知郎、東畑精一監修『十大経済学者——マルクスからケインズまで——』日本評論新社、1952年、344ページ。)

の量的経済学を、文化の変化を受けて進化していく人間行動の枠組みに組み込んだ。制度主義的な伝統のもとで量的経済学を発展させた。

そこで本稿においては、このような思想的特徴をもつミッチェルが、カッセルの経済思想をどのように捉えているのか検討していくこととする。このように考察することにより、ミッチェルの独自の制度主義の本質に接近することができ、さらに正統派の経済思想の特質の一端も浮かび上がらせることができると考えられるからである。そこでミッチェルの著『経済理論の諸類型』の第16章「グスタフ・カッセルの数学的手法<sup>18)</sup>」(“The Mathematical Approach of Gustav Cassel”)を逐次みていくこととする。

## II カッセルの数学的手法

カッセルは、ミッチェルのみるところでは、経済理論の非常に純粋な類型を近代的に簡略化した型の代表者である。もともとその類型は、ワルラスが初めて系統立てて述べた。

そこでミッチェルは、ワルラスの考えを次のように説明する。ワルラスが直面した事実、所与の市場で、多くの商品が間断なく購入・販売されている場合、全ての単一価格は全ての他の価格に依存していることである。つまり所与の品物の価格を説明するには、まず他の全ての価格を説明できていなくてはならない。

ワルラスにとって、所与の時点で任意の数の商品の価格を相互に決定する問題は、理論上、議論の余地がない。価格を論ずる際、特定のデータを使用するが、そのデータに基づいて多くの方程式を立てることができる。これは未知数の数に等しい。未知数の数に等しい連立方程式を立てることができるからである。

極めて多数の財の価格は、所与の市場で所与の

時点に一齐に決まる。これは、概念上、どのように起こりうるか理解することができる。しかしミッチェルによれば、方程式に必要なデータを得ることはできない。たとえ得られたとしても、解くことはできない。方程式の数が極めて多いからである。要するに純粋に形式的な意味で議論の余地はないということである<sup>19)</sup>。

その分析は静止状態を暗黙的に仮定する。市場は完全競争である。理論は、現実の生活状態ではなく、特定の架空の状態に当てはまる。ミッチェルは、このように均衡を描いたところで、現状を現実的には描写していないという。分析道具として用いているだけである。しかしそれなりに有益である場合もあると考える。第一、均衡の変化を引き起こすものは多様であることを示唆する場合である。第二、景気循環を解釈する説明が極めて多いことを示唆する場合である。経済の要素全てが互いに調整されるなら、均衡から逸脱することは、多くのタイプの調整不良の見地から解釈できる。第三、累積的に運動することがどのように起こるか理解するのに役立つ場合である。一つの価格が上昇するなら、それは他の若干の価格が上昇するはずであるからである。その場合、均衡は維持されている<sup>20)</sup>。

価格上昇は、供給の増加を生み出す。これは価格を最初の点に引き戻す。かくして一般均衡理論は、経済の様々な要素が規律的に複雑になる相互関係を描いているので、均衡の攪乱がどのように拡張し一般的になるかを描くのを築き上げるうえで役立つとミッチェルはいう<sup>21)</sup>。

ミッチェルによれば、ワルラスの説明は、当初、経済学者には強い印象を与えなかった。しかし経済現象は常に相互に依存していることが把握されるようになるにつれて、ワルラスの方法に対する関心は復活した。その方法を展開して、より広範

<sup>18)</sup> W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory*, Vol. II, pp. 417-445.

<sup>19)</sup> *Ibid.*, Vol. II, p. 418.

<sup>20)</sup> *Ibid.*, Vol. II, pp. 419-420.

<sup>21)</sup> *Ibid.*, Vol. II, p. 421.

に適用できるような努力がなされている。ヘンリー・L・ムーア（Henry L. Moore）らは、連立方程式を巧みに操っているワルラスの基本体系を変形して、価格問題を具体化させることができると考えている。統計データを用いて、動態問題を分析できるからである。その技術を発展させようとする様々な試みのなかでも、カッセルの理論は最も大胆であるとミッチェルは捉える。上記の考えをカッセルはどのように用いるかみる。

カッセルは、1899年に、最初の重要な論文「入門価格論概説」（“Grundriss einer elementare Preislehre”）を発表した。この研究において、ワルラス体系を発展させることに着手した。自身の研究をワルラスに基礎づけた。それから利子の問題に戻り専門書を出版した。『利子の性質と必要性』（*The Nature and Necessity of Interest*, 1903）である。同時に貨幣論にも関与するようになった。

カッセルは、その著『社会経済学原論』（*Theoretische Sozialökonomie*）を1918年に出版した。ミッチェルは、この著作を中心にカッセルの経済思想を読み取っていく。

ミッチェルは、カッセルの養成課程は、その接近法を理解するうえで重要であると捉える。工学を研究し始めて、1894年に数学の博士号を取得、32歳のときに経済学に転向した。そのときまでに知的習慣をある程度身につけていた。この素因を与えたのが気質であった。また工学の教育課程が、さらに知的習慣を定着させた。

カッセルは、その著『社会経済学原論』の序文でこう述べる。

「経済科学を研究した、まさに最初から感じていた。経済学の独立した一つの章として旧来の価値論をすっかり捨て、最初から科学を価格論に基づいて構築することができるはずである。そうすればこのように、多くの不要な論考を取り除くこともできる。その論考は、かなり術学的な性質を帯びているのがほとんどである。これまで経済学の論文に苛酷な負担をかけてきたものであ

る<sup>22)</sup>。」

ミッチェルに従うと、カッセルは、いわゆる「主観的価値学説」を受け入れるのを嫌う。ミッチェルは、カッセルが価格決定にどのように取り掛かるかみる。カッセルは特定の一つの商品を取り上げる。一つの市場があると仮定する。そこで商品が売買される。自称買い手がたくさんいる。各々は当該商品の連続的增加に対して一定の価格を支払う。これに対して市場の側には売り手がたくさんいる。自分の供給物を進んで売り払おうとする。その際の価格は、在庫の単位量が少なくなるにつれて変化する。同時に自由競争あるいは完全競争も想定する<sup>23)</sup>。

想定した状況下で、品物の価格は一定の範囲で決まることを示すことができる。ミッチェルは、カッセルの所説を引き合いに出す。

「特定の商品に対して、所与の市場で所与の時点に、価格がどのように決まるか示すことができる。このようなあまり例外的でないタイプの問題だけを考察したいと思っているのではない。今度考察したい問題は、時間が経過するにつれて、需要が変化し、また供給が変化することも考慮に入れる<sup>24)</sup>。」

ミッチェルは、カッセルは供給状態についても同じように分析するという。商品が持ち出される条件は、比較的短期間、長期間、超長期間を考えるかに応じて異なる。期間の長さを分ける土台は、即時取引、新たな生産を許可するほど長い期間、生産要素それ自体の変化を考慮に入れるほど長い期間に関わる。

市場にある、ある一つの品物を論ずる場合、認識しなければならないことは、その品物と交換に進んで支払うものは、様々な他の品物を得ることができる価格によって影響を受けることである。

<sup>22)</sup> Gustav Cassel, *The Theory of Social Economy*, translated by S. L. Barron (New York: Harcourt, Brace, 1932), p. vii.

<sup>23)</sup> W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. II, p. 424.

<sup>24)</sup> *Ibid.*, Vol. II, p. 424.

代替のきかない商品はほとんどない。ある品物に対する需要は、その他の商品がどのような条件で供給されるか分かれば明らかになる。

ミッチェルによれば、この見解は供給にも当てはまる。実業家は自身の資本投資や組織力を考えているとき、消費者がもつ代替手段を同じように選択する。その結果利潤が分かれば、特定の品物に支払うどのような種類の価格が、供給物を生産させるようになるか決定できる。換言すれば、その商品に対する需要とは何であるか、あるいはその供給とは何であるかを決定できて、ようやくその他の財貨がもつことのできる価格ならびに他の財貨が供給される価格が分かる。

ミッチェルは、ワルラスは  $n$  個の商品の価格が、定められた時間にある市場でどのように決まるかを問題としたという。一連の様々な連立方程式を立てて解いた。定められた時間に市場で販売する一商品の総計は、その時間に提供する量に等しい。つまり需要は供給に等しい。それゆえあらゆる商品の供給は、その生産費の合計に等しくなる。さらにあらゆる商品の需要は、その商品やその他の商品が販売される価格の関数である。その価格でその商品とその他の商品は全て売ることができる。このようにして一市場の  $n$  個の価格を同時に決定するという問題を解くことが可能となる<sup>25)</sup>。

ミッチェルの見地からすると、まず実際には、方程式を立てるのに必要なデータを得ることができない。ワルラスが決定することができなかったことがある。それは、特定の商品のどれくらいの単位を、個人は市場で連続する価格で進んで購入するかである。また様々な売り手が、供給の連続的な単位と引き換えに、どれほどの価格を受け取るかも決定することができなかった。これらは基本的なデータである。このデータを発見できなければ、ワルラス体系は、極めて一般的な意味でしか一般的な問題を解くことができないとミッチェ

ルは解する<sup>26)</sup>。

ワルラス類型の研究は、カッセルの数理的知性の持ち主に訴えた。その研究成果は、カッセルの著『社会経済学原論』にみて取れる。四部に分かれる本書の第一部は、経済学通覧であり、自身の基本的な見解を提起する。最も重要な主張は、カッセルが認めているように、何が経済状態を構成するか、その意味を明確にすることである。カッセルの経済理論の問題に関わる所説を、ミッチェルは引用する。

「共通の要素は、全経済活動が帯びる明確な経済的性質を決定するので、そのような活動の最終状態である。つまり欲望全体を満たすには、明確な限界があるということである。なるほど欲望のなかには、無限に満たすことのできるものがある。これは、例えば、呼吸をしたいという欲求についてはそうであるのが普通である。だがそのような欲望を満たすことは、経済活動の領域から除外せねばならない。活動でも、欲望を満たすことが限定的にできるという条件に基づいて行うものだけが、経済活動とみなすことができる。一般的に言って、欲望を満たすための限られた量の手段が利用できるからである。また文明人全体の欲望は飽くことを知らないからである。つまり欲望を満たす手段は、一般的に言って、欲望自体に比べ、相対的に『稀少』であるからである。稀少手段だけが、経済手段である。経済体制は、常に、かくして、欲望を満たす手段が稀少であるという条件の下で働く。この意味で経済学は『稀少性の原理』が支配する<sup>27)</sup>。」

ミッチェルは、経済状態を明らかにする基本的な特徴を人々が直面する状況に求める。その状況の下では、財貨の供給は、欲望を全て満たすには十分ではない。ある意味では、節約することが必要になる。これが稀少性の原理である。稀少性の原理が流布していないのなら、経済状態も存在し

<sup>25)</sup> *Ibid.*, Vol. II, pp. 424-426.

<sup>26)</sup> *Ibid.*, Vol. II, p. 426.

<sup>27)</sup> G. Cassel, *op. cit.*, p. 5.

ない。カッセルの所説を引き合いに出す。

「それゆえ経済学特有の課題は、欲望と欲望を満たすのに利用できる手段とを最も有利な方法で等しくすることである。この課題を首尾よく達成している限り、経済活動は真に経済的とみなすことができよう。

この問題は三つの異なる方法で解くことができる。第一、欲望を比例的に制限し、あまり重要でない欲望を排除することによってである。第二、明確な目標に役立つ手段を最良の方法で用いることによってである。第三、できることなら個人の生産力を増すことによってである<sup>28)</sup>。」

集団を扱うとき、交換をさらに問題とすることが重要性を帯びてくる。これらの集団のなかで、自分が生産するものは消費しないし、自分が消費するものを生産しないのが普通である。自分の欲求を満たすのに必要なものの供給は他人に依存しているし、自分が生産するものの市場も他人に依存している。したがって自分自身の欲望を満たすのに必要なものと引き換えに、用役をどれほど交換できるかが重要になる。自分自身の欲望をどれほど満たすことができるか、これは交換比率に依存している。財貨の供給は限られているので、その使用目的を欲望を満たすことにどのように順応させるか考えるとき、その範囲はものもつ価格にみいだすことができるとミッチェルは述べる<sup>29)</sup>。カッセルの次の所説に注目する。

「貨幣でも、個々の世帯が欲望を満たすのと引き換えに与えるものに関しては、世帯は社会のなかで財貨供給に対する一定の需要を作り出す。これらの財貨の量は限られているのが常であるから、財貨に対する需要はある意味で制限されるに違いない。つまり欲望のなかには満たすことのできないものもある。この制約は、価格決定が生み出す<sup>30)</sup>。」

ミッチェルのみるところでは、価格は、経済生活、それゆえ経済理論において、手段であるがゆえに重要である。それによって欲望を満たすことは、稀少性に強いられながら制限される。これは経済理論の中心的な特徴は、価格理論であるということになる。価格は欲望を満たすのを制限するという重要な役割を演ずるから、どのようにして決まるかということになる<sup>31)</sup>。カッセルはこう述べる。

「消費を制限することが、強くなればなるほどそれだけ、財貨の稀少性は、消費者の需要と関連して高まる。またそれゆえ価格は、大部分、この稀少性によって決まるから、価格を決定するという望ましい目的は、稀少性の原理を表現していることが分かる。その概要を第一部で説明した。『かくして交換経済においては、稀少性の原理が、価格の圧力によって、消費を財貨の相対的に稀少な供給に合わせるのに必要であることを示している<sup>32)</sup>。』」

価値論を価格理論の土台としてもつことがなぜ必要ないのか、ミッチェルはその理由をカッセルの説明に沿ってみていく。

価値評価は相対的であるし、価値評価を公分母に還元することが必要である。つまり価値評価を貨幣で表す。主観的な経済要因を考察することができる。ただその要因が、価格がどのように決まるかに現れる場合だけである。特殊な価値論は、経済学では不要ということになる。貨幣単位を使用せずに価値論を組み立てることは困難である。貨幣単位があるから価格がある。ミッチェルは、カッセルの見解を引用する。

「しかし共通の尺度が導入された途端に、貨幣はその本質においては、自明のこととされる。価値は、それで価格に、価値評価は価格決定に取って代えられる。そして価格理論をもつ。価値論に代わるものである。ここから下さざるをえない結

28) *Ibid.*, p. 5.

29) W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. II, p. 428.

30) G. Cassel, *op. cit.*, p. 66.

31) W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. II, p. 428.

32) G. Cassel, *op. cit.*, p. 74.

論は、いわゆる価値論全体は、経済学においては放棄すべきことである。交換経済を理論的に説明することは、初めから貨幣を考慮しているし、かくして価格がどのように決まるか、この理論を立てることになるのが本質である。

これは、極めて単純化していることを表している。論争を起す多くの問題を完全に避けることができる。しかもその問題をめぐって、無用な困惑が、現在、広がっていることが多い。経済学から解放できる議論は、経済学の質を、最悪の類の伝統的教義固執へと低下させることがよくある。……そのように徹底的に追放することは、絶対的に必要である。その場合、経済理論の現実の議論の余地なく非常に重要な問題に可能な限り専念したいと願っている<sup>33)</sup>。」

さらにミッチェルは、カッセルの主張を引き合いに出す。

「価格を問題とすることに関連して、需要をさらに分析することはもはや必要ない。需要が、一定の価格で、どれほどであるか、これは明白な事実である。量的かつ完全に算術的に表現できるからである。そしてこの形で、経済科学が、その構造の一部として、直接的に利用できるからである。心理学的過程は、この事実の基礎となっており、経済学者に一定の興味をもたせるのは当然である。心理学的過程を知ることによって、経済学者を助けて、価格が需要にどの程度影響を及ぼすか、正確に判断させるからである。心理学的過程が解明される限りでは、その過程はこの見地から最もうまく研究できる。そのような研究は、その問題を明らかに量的に概念化する見地から追跡するという事実からしか有利な点を引き出すことはできない。その著作で議論した価格理論は、いわゆる価値論と対照区別して、心理学的経済学研究をより難しくさせるという考えは、あるいは心理学的経済学研究を除外するという考えは、かくして完全な誤解に基づいている。そのように研究す

ることは、しかしながら、経済理論本来の意味で範囲外である。

このように色々述べることは、世に知られている『限界効用理論』に関連して特に重要である。この多く議論されてきた理論に対する主たる異論は、それが経済科学では無用であることである<sup>34)</sup>。」

したがってカッセルは、「一般的な社会・経済理論が含む領域は、厳密な意味での理論経済学と比べ、はるかに広い。理論経済学の課題は、価格がどのように決まるかを解明することである<sup>35)</sup>」と主張する。この点でカッセルの見地は、ハーバート・J・ダヴェンポート (Herbert Joseph Davenport) と同一であるとミッチェルはみる<sup>36)</sup>。

ダヴェンポートは、価格を議論する際、一つの価格を他の様々な価格に基づいて説明するから、それをミッチェルは回りくどくて表面的であると捉える。企業家の目的には十分であるけれども、経済学者の目的にとってはそうでない。

それゆえミッチェルは、ダヴェンポートが、真の諸力とは何であるかを指摘することが必要であると考える。しかしながらカッセル同様、それらの諸力を分析することは拒み、経済学の理論が干渉すべきことではないとした。カッセルによれば、真の諸力は経済学者に関心をもたせるが、これを調べることは経済学者の務めではない。

ミッチェルの分析では、二人ともこの点ではアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall) と著しく異なる。マーシャルは真の諸力から始め、当然のこととみなしていることは、貨幣価格の重要性は、貨幣価格が真の諸力を経済学者が測定す

<sup>34)</sup> *Ibid.*, p. 80.

<sup>35)</sup> *Ibid.*, p. 184.

<sup>36)</sup> ダヴェンポートとカッセルは同一の結論に到達する。ダヴェンポートは、経済理論史の研究に時間を費やしてきたが、カッセルは以前の経済理論の諸類型を入念に研究することにはそれ程時間を費やしてこなかった。——W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. II, p. 433.

<sup>33)</sup> *Ibid.*, p. 49.

る唯一の方法であるという事実にあるからである。しかしながらカッセルは、その種の分析を経済科学から追いつきたいと思う。ダヴェンポート以上に過激である。カッセルは、真の諸力とは何であるか示すことは、自分の職務ではないとすら考えているからである。カッセルは、また、ダヴェンポートと異なり、認めないことがある。価格を分析することは回りくどくて表面的であることであるとミッチェルはいう<sup>37)</sup>。

カッセルからみると、自分の主たる貢献のなかで実質的な価値をもつものは、第一編第四章「価格決定機構」である。

第一に、商品の価格全てを考慮しているとき、全商品の供給は既知である。貨幣総額は、あらかじめ決まっている。人々は自身の製品を交換する。自分が生産した財貨の一定部分を用いるときはいつでも、自分自身で供給の一部分を購入しているとカッセルはみなす。ミッチェルは、カッセルの見解を引用する。

「価格を変えるなら、特定の商品のうち、どれくらい個人がある特定の価格で購入するか決定することができる。あるいは換言すれば、個人の需要は価格とともにどのように変化するか決定することができる<sup>38)</sup>。」

そこでミッチェルは、次の見解を披瀝する。

「カッセルは、しかしながら、理論家に気づかせる。この立場を取ると、理論家はその考察を、当該の特定の品物に限定することができない。個々の消費者の特定の品物に対する需要が決まって、ようやく、購入することができる品物全ての価格が決まる。かくしてカッセルは、自身の分析の出発点として、次の形式をもつ一連の連立方程式を立てることに取り掛かる。

$$D_1 = F_1(p_1, p_2 \dots p_n)$$

$D_1$ 、つまり商品1の需要は、 $p_1$ 、つまり当該の特定商品の価格、 $p_2$ 、二番目の商品の価格等々

の  $F_1$  に等しい。その市場で取り扱う全てのものの価格について、ついには、商品  $n$  に至る。これは、一番目の商品に対するこの市場での需要は、全商品がその市場で売れる価格の関数とみなすことができるということにすぎない。

それから第二の方程式がある。

$$D_2 = F_2(p_1, p_2 \dots p_n)$$

これらの方程式体系全体がある。ついに理論家は以下に達する。

$$D_n = F_n(p_1, p_2 \dots p_n)^{39)}$$

理論家は、市場におけるあらゆる商品に対して、上述の形式の方程式を立てる。特定の品物に対する需要は、その品物の価格の関数であるばかりでなく、市場の品物全ての関数である<sup>40)</sup>。理論家はどのようにして未知数は何であるかみいだすことができるのか、ミッチェルは説明を続ける。

一連の方程式が表すことは、各商品に対する物的需要とその物的供給は、均衡状態では同じであることである。均衡状態下では、 $D_1$  で考える一番目の商品に対する需要は  $S_1$  に等しい。そして  $D_2$  は  $S_2$  に等しい、等々である。結局  $D_n$  は  $S_n$  に等しくなる。

$$D_1 = S_1; D_2 = S_2 \dots; D_n = S_n$$

第三段階が生ずる。一連の  $D$ 's が一連の  $S$ 's に等しいから、また  $S$ 's が既知であるから、一連の方程式は次の通りになる。

$$S_1 = F_1(p_1, p_2 \dots p_n)$$

$$S_2 = F_2(p_1, p_2 \dots p_n)$$

$$S_n = F_n(p_1, p_2 \dots p_n)^{41)}$$

<sup>39)</sup> W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. II, p. 433.

<sup>40)</sup> カッセルは需要方程式についてこう説明する。

「ある商品の需要と価格との関連を、最も効果的に示すことができるのは、選択したその商品の価格が独立変数である場合である。それからその価格を変えると、その商品のうちどの程度を、個人はある所与の価格で購入するつもりであるのか確定することができる。あるいは換言すれば、個人の需要は価格とともにどのように変化するか確定することができる。」G. Cassel, *op. cit.*, p. 138.

<sup>41)</sup> W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. II, pp. 433-434.

<sup>37)</sup> *Ibid.*, Vol. II, p. 431.

<sup>38)</sup> G. Cassel, *op. cit.*, p. 138.

ミッチェルは、カッセルの主張に沿って次のように説明する。

「理論家は、上記の市場で、 $n$  個の商品の価格を決定しなければならない。つまり未知数の価格を決定しなければならない。そして未知数は  $n$  個ある。 $n$  個の商品の供給はあらかじめ一定である。これらの方程式は  $n$  本である。 $n$  個の未知の価格を決定するのに使用することができる。つまり最初の一団の方程式によって、理論家は、財貨全ての価格が、市場でどうであるか確定することができる。そして市場で同時に  $n$  個の商品の価格を確定する問題は、これらの条件の下で解くことができる<sup>42)</sup>。」

これまでみてきたように、ミッチェルは、問題の第一段階を議論し、カッセルの理論がどのような性格を帯びているか明らかにしようとした。さらにミッチェルは、この一連の議論の段階のなかでも、最も一般的な考えを次のように紹介していく。ミッチェルは、第二の事例をこう説明する。

「第二の事例において、カッセルが捨てる仮定は、特定の期間に、商品の供給はあらかじめ決まっていることであり、代わりに用いる仮定は、様々な生産要素は決まっているけれども、販売する商品量は、その期間に生産するものである。この問題を論ずるために仮定することは、 $r$  個の異なる生産手段があることである。これらの若干の生産手段は、 $R_1, R_2, \dots, R_n$  によって示す。かくして述べることは、供給する品物の一つを生産するために、つまり  $S_1$  を生産するために、その期間に生産する一番目の商品の供給は、一定量の要素を必要とすることである。……

利用できる各商品の総供給は、かくして  $S$  と表すことができる。各特定の商品を製造する際に使用する各生産要素の量の合計に等しい。……

同様に指摘することは、 $S_1$  の単位の価格は、それを生産する際に用いる生産要素全ての価格に等しいことである。そして要素の価格を  $q$ 's とし

て扱う。…… $q$ 's を決定する問題に取り組む。…… $S$ 's から始めるけれども、当然視する  $S$ 's は、生産要素から生み出されることである。いまや、それも当然視している。そして上記の  $R$ 's が当然視されるなら、その手順に向ける同一種類の段階はあと一つしかない<sup>43)</sup>。」

さらにミッチェルは、第三の事例についてこう述べる。

「第三の事例をカッセルは考える。この事例においては、貨幣の総額は、人々が予定している期間に財貨に使わざるをえないとき、あらかじめ決まっているのではなく、その期間に生産する過程に関与することに由来する。ある人は、自分が所有する生産要素が何であれ、その一定額を販売することによって貨幣所得を得る。……引き出す総所得は総価格に等しいに違いないのは当然である。生産要素全ての利用と引き換えに支払うからである<sup>44)</sup>。」

ミッチェルによれば、第四の事例においては、これまで主張してきた仮定を捨てる必要がある。定常的経済と仮定しない。代わりに用いる仮定は、生産が増大するという意味で進歩が起こるのは時折とすることである。一定不変のペースで前進する。そのことは、結論を導出する際、使用する生産要素の量を加えることしか意味しない<sup>45)</sup>。

ミッチェルは、多分第五と呼ぶことができる重要な事例において、カッセルは、自身の分析は価格をめぐっては、様々な商品の価格に存する関係しか述べていない点を指摘する。体系全体のなかである一つの商品価格を決定することができるなら、他の全ての価格が暗に決まる。価格がどのように決まるか、その理論を一般的に立てるには、特殊理論によって補わねばならない。特定の品物が交換するうえで用いられるとき、その品物の価格を決める要素を扱わなければならない。すなわ

43) *Ibid.*, Vol. II, p. 437.

44) *Ibid.*, Vol. II, p. 437.

45) *Ibid.*, Vol. II, p. 438.

42) *Ibid.*, Vol. II, p. 434.

ち貨幣である。そして第三編「貨幣」のなかで分析する要素は、金価格、金の価格変動、一般物価水準の変動を決定する。価格の一般理論と貨幣の価値論との融和的な理論的關係を定める。

ここでミッチェルは、カッセルの景気循環論も念頭において、次のように議論を展開していく。

「まずカッセルが明言することは、経済学者が費用の一部としてみなすべきものは、企業家の時間に対する報酬、企業家が使用する資本に対する利子、企業家が直面する危険全てに対する補償である。これらの三項目が合計に加えられ、この合計が、企業家が負う費用をも含むなら、カッセルの考えでは、この合計は価格に等しいのが普通である。カッセルの主張によれば、このように計算した販売価格が費用を越える、その余剰が一般に広く行き渡っているなら、それは、おそらく、景気循環の繁栄局面に限られるであろう。カッセルが考えるに、多分真であろうことは、好況期は利潤が普通であり、不況期は損失が普通である。さらに利潤が発生する事例は多い。特定の独占を確保することができる個人がいる事例である。多分、その場合、設定できる販売価格の数字は、支払った総額に時間に対する収益を加えたものを含み、資本利子や危険に対する補償をも含む<sup>46)</sup>。」

カッセルは、利潤ならびに好況時・不況時における利潤の変化を論ずる。これが景気循環論を扱っている第四編である。カッセルの景気循環論の様式は、価格決定の理論とは異なる。いつ利潤が広く行き渡っており、いつ販売価格が費用を下回るかみる。費用に含むのは、企業家に支払われる時間に対する報酬、資本、および利潤である。

価格理論は、それが妥当であるかどうかに関しては、その基礎をなす価値評価の理論に依存していないとミッチェルは捉える。財の選択は選好の規準を意味する。それは、需要曲線、需要表あるいは無差別曲線によって表すことができる。経済

学者に需要曲線あるいは需要表を与件として受け入れさせ、それを価格説明の基礎とする。価格には生産要素の価格も含める。この見地に、相違はあるものの、ヴィルフレド・パレート (Vilfred Pareto)、カッセル、フランク・A・フェッター (Frank Albert Fetter)、ダヴェンポートらが立った<sup>47)</sup>。そこでミッチェルは、次の見解を披瀝する。

「この近代的様式は便利であるけれども、深刻な短所もある。最も重要で明白なのは、経済理論は、かなり自信に満ちていた時代に比べ、皮相な水準で進展するという結果になることである。理論家はデータを使って研究するが、データを解釈すると公言はしない。どんな科学であれ、扱う事象全てを説明することはないのは当然である。しかし科学はそれぞれ自身の抱える問題をなお一層深く徹底的に調べようと努力する。この過程を反対方向に向けより皮相的になることは、好ましくない<sup>48)</sup>。」

そこでミッチェルは、カッセルが、基本的には、ジェレミー・ベンタム (Jeremy Bentham) に起源があるとされる特徴をもつ人間性の概念を用いて研究しているとし、こう述べる。

「経済行動を理解することは、相変わらず、極めて図式的、皮相的、技術的である。そのとき、人間は何を得ようと努力し、何を避けようと努力するかについて知らないままであるのは明らかである。ただ人間は何を選好するか、その規準をもっているだけで述べれば、熟考するための土台は置かれる。このように熟考することは、論理的にはエスキモー人やロンドンの銀行家、10世紀の人々や20世紀の人々、戦争中の人々や平和な人々に当てはまる。そのような仮定から導き出すことができる結論は、まさにその普遍性のため、いつでもどこでも事実と合致しなくなってしまう。経済史家が、最近の抽象的な類型の経済理論から学ば

<sup>47)</sup> Wesley C. Mitchell, "Facts and Values in Economics," *The Journal of Philosophy*, Vol. 41, No. 8, April, 1944, pp. 212-219.

<sup>48)</sup> *Ibid.*, pp. 214-215.

<sup>46)</sup> *Ibid.*, Vol. II, pp. 439-440.

うとすることは、ほとんど大部分、禁じられている<sup>49)</sup>。」

ミッチェルは、「金銭的分析に関わる理論がもつ科学上の欠点は、……一つの制度の論理を発展させていると了解していない、もっともその制度は、経済行動に部分的にすぎないけれども影響力はもっている<sup>50)</sup>」と結論づける。

### Ⅲ カッセルの数学的手法の限界

ここでミッチェルの所説を整理しつつ、検討してみることにする。

ワルラスは、経済理論の純粋な類型を系統立てて述べた。それを近代化・簡略化したのがカッセルである。そこでミッチェルは、まず、ワルラスに従って一般的経済均衡を概念的に説明する。ワルラスの考えをどのように使用するか、カッセルの著『社会経済学原論』を中心にその方法を考察する。

カッセルの主張によれば、「主観的価値学説」は経済学では不要である。ミッチェルは、カッセルの価格決定方策の問題への特定の接近方法をみる。特定の一つの商品を取り上げ、一つの市場があると仮定し、そこで商品が売買され、大勢の買い手がいる。各々は、当該のその商品の連続的増加に対して一定の価格を支払う。これに対して市場の側には、売り手がたくさんおり、自分の供給物を進んで売り払おうとする。価格は在庫の単位量が少なくなるにつれて変化する。それゆえ想定した状況下で、価格は一定の範囲で決まることを示すことができる。

また財貨の供給は、欲望を全て満たすには十分ではない。稀少性の原理が流布する経済状態には、あまり重要でない欲望をある程度除外することに

よって、また手持ちの在庫品を最善に利用することによって、さらに供給を増大させることによって対処しなければならない。

カッセルにとって価格は手段である。それによって欲望を満たすことは、稀少性に強いられながら制限される。これは理論経済学の課題は、価格がどのように決まるかを解明することであるということになる。

そこでカッセルは、個人の需要は価格とともにどのように変化するか決定することができることを第一に示す。第二の事例として、様々な生産要素は決まっているけれども、販売する商品量は、特定の期間に生産するという仮定に基づいて価格にまつわる問題を論ずる。第三に貨幣の総額は、人々が予定している期間に生産する過程への関与に由来する事例を考える。第四に生産が増大するという意味で進歩が起こるのは、時折である事例を考察する。第五の事例において様々な商品の価格に存する関係を示し、価格の一般理論と貨幣の価値論とが統合された理論的關係を与える。

さらにカッセルは、利潤に注意して独自の景気循環論を呈示する。

経済理論は、ミッチェルの考えでは、皮相的水準で進展する。カッセルは、一つの制度の論理を発展させていると了解していない。

換言すればミッチェルは、カッセルの類型は、経済行動の金銭的論理体系を導出し、制度上の行動を理解するのに役立つと捉えている。支配的な金銭上の論理に暗黙的に従うと、どのように行動するかに関与する。金銭的論理を、不毛の領域あるいは検討し尽くされた領域として無視することはない。カッセルの類型がもつ価値を経済理論の一部として認める。しかしミッチェルの見地からすれば、カッセルは重要な問題に関わっていない。経済行動がどのように発現するか、その過程において行動を説明していない。ミッチェルがこのように考える理由は、彼が獲得した知的・哲学的志向性によって説明できよう。すなわち文化概念と結びついた経済学の見解である。

49) Wesley C. Mitchell, "The Role of Money in Economic History," *The Journal of Economic History*, Vol. 4, Supplement, December, 1944, p. 65.

50) W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory*, Vol. II, p. 445.

カッセルは、文化を無視しがちである。分析単位である個人は、時間と空間に特有ではなく、合目的である。時間と空間の全てにおいて利己心に同様に反応するとしている。換言すれば、人間はひたすら上首尾に自分自身の利益を追求するかのごとく、またその利益は貨幣所得を極大にするかのごとく行動すると仮定する。行動様式は、普遍的な人間性に由来する。文化に留意することはない。

これに対してミッチェルは、文化概念を使用する。文化は、そのなかに制度を埋め込んでいる。制度の複合体である。文化的脈絡あるいは制度的枠組みを分析・記述することが重要となる。その脈絡、枠組みのなかで特有の経済行動が生ずるからである。制度的・社会的様式を個人行動の決定要因とみなす。個人を文化の視点から理解し、文化が個人・集団行動にいかなる影響を及ぼすか考察する。

このような観点からミッチェルは、文化から取り出した部分を研究することはない。特定の事象が関わる文化は看過できない。一定の部分がどのような性格を帯びるかは、その部分が属する全体によって決まるからである。部分より大きな全体のなかで、部分がどのように機能し、どこに位置づけられるかによっても決まるからでもある。現実には、変化過程とみなすことができる。その過程は、部分と全体が動的に相互作用することによって駆動する。したがって社会経済的行動・活動が変化し動的であることを重要視する。

カッセル同様、ミッチェルも、経済の現在の断面的な分析、つまり、現在の経済体制の作用を分析した。しかしこの作用は、カッセルと異なり、ミッチェルは経済の累積的変化過程にあるものとした。経済過程が現在どのように作用しているかと、累積的にどのように変化しているかを同時に説明しようとした。

ミッチェルのみるところでは、現在の文化において、最も強い影響力を及ぼす制度が貨幣経済である。貨幣を使用することは、顕著な特徴となっ

ており、近代の経済組織体制をそれ以前の体制と区別する。貨幣は、近代の金銭的制度の複合体を表している。貨幣経済はその型を不安定な人間性に深く刻み込むし、貨幣経済が与える標準的な刺激に対して、標準的な様式で反応させるようにする<sup>51)</sup>。

貨幣を使用することは、経済生活それ自体を合理化するので、その生活の理論を合理的に立てるための基礎を築く。貨幣は、経済科学の根源である。「貨幣経済の制度が、人間行動を形成する際に、いかに力があり浸透しているかを最も強力に証明しているのは、人間は貨幣経済を完全にしつけられた子と想定する経済理論の類型が、何世代にもわたって、社会科学として通用することができたことである<sup>52)</sup>。」

見方を変えれば、制度は人間行動を規定する。それゆえ経済を研究する際、制度に注意を集中しなければならない。人間は文化のなかで進歩する。これは制度が累積的に変化することによるのが大部分である。経済的に有利であるか不利であるか計算することは、現実に広く行われていることに鑑みれば、貨幣を使用することを文化的に反映している。経済計算は一つの制度になっているということである。

翻って貨幣を使用することによって生まれる心の習慣が、快楽・苦痛計算をもっともらしく思わせる。かくして貨幣を使用することは、人間行動の原理に対して心理学上の基礎となる。経済理論は、私的な略奪的見地から述べると、金銭的論理体系となる。この体系は、ある一つの制度的要因だけがいかに重要であるか誇張してみせる。人間は、その他の制度的要因を無視して行動すると想定するからである。

ミッチェルの観点から、経済的合理性を仮定することは、誤っているというよりむしろ不適切で

<sup>51)</sup> Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950), p. 371.

<sup>52)</sup> *Ibid.*, p. 371.

ある。産業的・金銭的雇用、消費活動を説明することはできない。経済学者は主要問題を見逃してしまうことになる。経済的合理性がどのようにして生まれるか問題とすることはない。ミッチェルは次の見解を披瀝する。

「制度を研究していることを認識すると、自身の研究を歴史的展望のなかに留めておく。制度が、その進化の特定の段階でどのような形を呈するか、分析することに専念するときですらである。そうすることで、知的展望を開き、将来の研究を誘い出す。……あらゆる学問分野が自分の問題に投じる光明から教訓を得たいと思う<sup>53)</sup>。」

こうしてミッチェルは、行動主義的見地を採用することによって、経済学は経済行動を扱う科学であると考えた。この含意を捉えることで、経済理論の類型の相互関係を認識しつつ、経済学全体の枠組みのなかで、経済生活にいかに関与できるかを示して、適切な場に理論の全ての類型を位置づける。ミッチェルの目的は、旧来の研究に限界があることを明白にするばかりではなく、それをどのようにして推進できるか、さらに経済行動の包括的な研究にどのようにして適合させることができるかを示すことである<sup>54)</sup>。

ミッチェルは、カッセルの理論を、文化概念と結びつけた行動主義的見地から批判的に考察し、累積的に変化する経済行動を制度的に解釈することを重要視する。カッセルの理論を作業仮説として検討し、それを通してその理論の強みと弱みを的確に把握した。

#### 参考文献

- Brems, H., "Gustav Cassel Revisited," *History of Political Economy*, Vol. 21, No. 2, Summer, 1989, pp. 165-178.  
 Cassel, G., *The Nature and Necessity of Interest* (New York: A. M. Kelley, 1971).  
 Cassel, G., "Grundriss einer elementare Preislehre,"

*Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft / Journal of Institutional and Theoretical Economics*, Bd. 55, H. 3, 1899, pp. 395-458.

Cassel, G., *The Theory of Social Economy*, translated by S. L. Barron (New York: Harcourt, Brace, 1932).

Hill, F. G., "Wesley Mitchell's Theory of Planning," *Political Science Quarterly*, Vol. 72, No. 1, March, 1957, pp. 100-118.

Homan, P. T., *Contemporary Economic Thought* (New York: Books for Libraries Press, Inc., 1968).

Mitchell, W. C., "Facts and Values in Economics," *The Journal of Philosophy*, Vol. 41, No. 8, April, 1944, pp. 212-219.

Mitchell, W. C., Letter to John M. Clark, reprinted in John Maurice Clark, *Preface to Social Economics* (New York: Farrar and Rhinehart, 1936).

Mitchell, W. C., *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950).

Mitchell, W. C., "The Role of Money in Economic History," *The Journal of Economic History*, Vol. 4, Supplement, December, 1944, pp. 61-67.

Mitchell, W. C., *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*, Vol. II (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969).

Oser, J., *The Evolution of Economic Thought* (New York: Harcourt, Brace & World, 1970).

Samuelson, P. A., "Alvin Hansen as a Creative Economic Theorist," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 90, No. 1 February, 1976, pp. 24-31.

Samuelson, P. A., "Gustav Cassel's Scientific Innovations: Claims and Realities," *History of Political Economy*, Vol. 25, No. 3, Fall, 1993, pp. 515-527.

Schumpeter, J., *History of Economic Analysis* (London: Routledge, 1994). 東畑精一、福岡正夫訳『経済分析の歴史』上・中・下巻、岩波書店、2005～2006年。

Schumpeter, J., *Ten Great Economists: From Marx to Keynes* (London: Routledge, 1997). 中山伊知郎、東畑精一監修『十大経済学者——マルクスからケインズまで——』日本評論新社、1952年。

Trautwein, Hans-Michael, "Gustav Cassel (1868-1945),"

<sup>53)</sup> *Ibid.*, p. 256.

<sup>54)</sup> *Ibid.*, p. 371.

in *Handbook on the History of Economic Analysis:  
Great Economists since Petty and Boisguilbert*, edited

by Gilbert Faccarello, Heinz Dieter Kurz, Vol. I  
(Cheltenham: Edward Elgar, 2016).